



Title	札幌農学校所属博物館の利尻・礼文調査資料について
Author(s)	加藤, 克; Kato, Masaru
Citation	利尻研究 : 利尻町立博物館年報, 30, 7-30
Issue Date	2011-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/45464">https://hdl.handle.net/2115/45464</a>
Type	journal article
File Information	3003.pdf



## 札幌農学校所属博物館の利尻・礼文調査資料について

加藤 克

〒060-0003 札幌市中央区北3西8 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

### The Materials in the Museum of Sapporo Agricultural College Collected in Rishiri & Rebun Islands

Masaru KATO

Botanic Garden, Field Science Center for Northern Biosphere, Hokkaido University,  
N3 W8, Chuo-ku, Sapporo, Hokkaido, 060-0003 Japan

**Abstract.** In 1877, research on the natural history and archeology of the Rishiri & Rebun islands started by staffs and students of the Sapporo Agricultural College. The specimens and the materials which they collected are important to the culture of the islands. Unfortunately, we cannot use them, because the results of investigation did not been published. This article introduces the historical information of the specimens and the materials which are housed in the Hokkaido University Natural History Museum in the University Botanic Garden (former Museum of Sapporo Agricultural College).

#### はじめに

利尻島の考古学に関する調査の始まりは、明治二十年までさかのぼれるようである。昭和七年に利尻島・礼文島の調査に訪れた名取武光は、その報告の中で利尻島の考古学調査について次のように書き記している。

北海道北見国利尻礼文両島の史前学的調査は、北海道大学博物館としては、其の第一回は明治二十年に小寺助教教授其他学生に依って行われ、次いで八田三郎博士及当時学生であった柳川秀與氏は明治四十一年七月に同島を訪れた

しかし、北海道大学博物館によるこれら二回の調査報告は残念ながら公開されていない。

利尻島における考古学に関する最初の文献は、明治二十二年に石川貞治が『東京人類学会雑誌』に発表した「北海道遺跡地名表」である。

それには「北見国利尻郡鴛泊」が土器、石器を出土する遺跡として掲載されている。(略)

利尻島の考古学調査及び報告として内部の様子を明らかにしたのは、昭和七年七月から八月にかけて行われた北海道大学博物館による第三回目の調査である。調査は名取武光・後藤寿一によって行われた。この調査によって、利尻島では鬼脇・オタマリ(沼浦)・鴛泊・オトントマリ(大磯)の四地点を踏査し、その成果を昭和八年、「利尻、礼文両島に於ける考古学的調査報告」として、『史前学雑誌』に発表した。(利尻町史編集室、2000)

『利尻町史』の記述にみるように、利尻島の考古学史上、小寺、八田、名取ら「北海道大学博物館(現在の北海道大学植物園・博物館<sup>1</sup>)」関係者が果たした役割は大きなものである。また、利尻・礼文島の遺跡に関する最初の文献の著者として紹介さ

れている石川貞治も札幌農学校の卒業生であり、彼の採集した考古資料が北大植物園・博物館に寄贈されていること、石川が報告において博物館所蔵標本に言及していること（石川，1889）なども考え合わせるならば、彼の調査も博物館の活動の一部として位置付けることができるかもしれない。しかしながら、明治時代の北大植物園・博物館による調査内容や採集遺物については公表されておらず、以降の研究の中で利用されることがほとんどなかった。また、昭和の名取・後藤の調査結果（名取，1933；名取・後藤，1933）も一部が紹介されているに過ぎず、発掘によって得られた遺物の全容について必ずしも広く知られているわけではない。このような状況は、利尻・礼文両島の学術的発展に不利益をもたらすだけではなく、公共財としての文化資源を共有・保存・利活用してゆくための機関である博物館としても好ましいことではない。そこで本報告では、対象分野を考古学に限定することなく、明治から昭和初期にかけて北大植物園・博物館および関係者が行った利尻・礼文島における調査・収集の実態と、それらの調査によって得られた資料の現状報告およびそれらが有する問題点を明らかとすることで、今後の利尻・礼文両島における研究活動の基礎資料を提供することを目的としたい。

### 1. 明治 20 年小寺甲子二による採集活動

小寺甲子二は、札幌農学校五期生として明治 18 年に卒業し、翌 19 年に札幌農学校の助教として採用された人物である。農学校教諭として博物学を担当し、また博物館の主任としての役割をも担う立場にあった。小寺が博物館の責任者となった明治 19 年は、開拓使の廃止後に札幌農学校の管轄下に入っていた札幌博物場と、札幌農学校が独自に設置していた演武場内の標本室が統合され、一層の拡充が求められていた時期である。小寺が明治 20 年に利尻・礼文島に調査におもむいていたことは、名取（1933）と沖野（1999）によって紹介されているが、別稿（加藤，2008）で確認したように、明治 20 年には野澤俊次郎による道東の博物資料収集や石川貞治の地質調査及び鉱物採集、堀正太郎による

道北の植物採集などが精力的に実施されており、小寺の調査も札幌農学校の標本充実活動の一環として実施されたものと考えられる。

小寺の採集については、従来ほとんど注目されることがなく、名取（1933）による報告と、沖野（1999）によるアイヌ民族資料採集の記録の中に名前を見出すことができるのみであるので、まず北海道大学大学文書館に保管されている札幌農学校史料から、調査の概容について明らかとすべくとしたい。

以下の史料は、小寺が採集におもむくにあたって、札幌農学校に提出した届けである。

〔史料 1 明治廿年七月卅一日付 小寺甲子二届〕

御届

私儀

今般博物標品採集ノ為、北見国宗谷迄出張被命候二付、本日出発仕候間此段御届候也

札幌農学校助教 小寺甲子二(印)

明治廿年七月卅一日

札幌農学校長代理

幹事佐藤昌介殿<sup>2</sup>

〔史料 2 明治廿年九月一日付 小寺甲子二届〕

御届

私儀

博物標品採集ノ為北見国宗谷迄出張被命七月卅一日出発候所、右御用済ノ上一昨八月卅日帰札仕候二付、此段御届申上候也

札幌農学校助教 小寺甲子二(印)

明治廿年九月一日

札幌農学校長代理

幹事佐藤昌介殿<sup>3</sup>

名取と沖野の報告から、小寺による採集が明治 20 年 8 月であったことは知り得るものの、その採集の規模や期間、目的などは不明であった。本史料の記述から、小寺の調査は 7 月 31 日より 8 月 30

表1. 小寺甲子二による採集品一覧（北大大学文書館所蔵農学校簿書319「復命書編冊」所収，明治21年2月2日報告）

		Number of Species	Number of Specimens
一 蝶類	Rhoparocera	三十一種	百〇九品
一 蛾類	Heterocera	三十九種	五十五品
一 甲蟲類	Coleoptera	四種	十三品
一 網翅類	Neoptera	四種	八品
一 半翅類	Hemiptera	三種	四品
一 二翅類	Diptera	二種	五品
一 膜羽類	Hymenoptera	三種	六品
一 直翅類	Orthoptera	二種	三品
一 貝類			七品
一 アメ鱗			三匹
一 沙噀			三匹
一 アイノ骨	但不完全ノ者		一組
一 刀ノ鞘	土中ヨリ掘出セン品		一本
一 アイノ女子首飾玉			一品
一 古器物欠底部			八箇
一 全 縁部			十三箇
一 全 胴部			四箇
一 雷斧			一箇
一 貝化石			六箇
一 植物化石			七箇

日までの1ヶ月間，利尻礼文両島及び宗谷地方での博物標本の採集を目的としたものであったことが確認された。この調査の成果は，同じく大学文書館に所蔵されている小寺の復命書によって知ることができるので，こちらで紹介することとしたい。表1は，明治21年2月2日に小寺が「明治廿年八月利尻禮文嶋并北見国宗谷地方ニ於テ採集セン標本左ノ通ニ候也<sup>4</sup>」として報告した採集品の一覧である。これら258点の資料がどのように博物館に受け入れられ，管理されてきたのかについて確認してゆこう。

明治20年前後の札幌農学校所属博物館の活動を示す資料はあまり残されていないが，北大植物園・博物館に所蔵されている「札幌農学校所属博物館標本採集日記<sup>5</sup>」（以下「採集日記」と略記する）という台帳がある。これは，明治19年から大正初年にかけて北大植物園・博物館が収集した標本・資料を受け入れの年次順に記述してあるものである。ただし，年次に混乱が見られること，ある時期に一括して記載したことによる誤記があること，また登録方法が必ずしも一貫していないために，利用している分野ごとの類別番号に混乱が見られることなどの問題点があるが，明治時代の博物館活動を理解する上では欠くことのできない史料である。表2は，この「採集日記」に記載のある小寺の採集資料と考えられるものを抜粋したものである。

小寺が採集した資料数は，復命書では258点であったのに対し，博物館で登録された資料数は57点にすぎない。これは，小寺が採集した昆虫類が「採集日記」に記載されていないことが大きな理由である。札幌農学校所属博物館では，明治18年段階で600点を超す昆虫標本（六脚蟲類）を所蔵しており<sup>6</sup>，小寺が採集した標本が受け入れられなかったとは考えづらい。一方，大学文書館に所蔵されている明治20年4月から12月に博物館に受け入れられた資料の一覧（「明治二十年自四月至十二月 博物場採集品表<sup>7</sup>」）では，「有関節類」が160点の採集と1点の寄贈により増加し，所蔵標本数は777点となっている。この160点の小寺の利尻・礼文島採集標本であるかどうかは確認できないが，「採集日記」の明治20年採集標本には昆虫類が確認されず，史料間での矛盾が見られる。この点について明らかとする材料は現在見出し得ていないが，以下のように考えておきたい。「博物場採集品表」に記載がある以上，明治20年に160点の「有関節類」が博物館で登録されたことは間違いない。これらが小寺の利尻・礼文島採集標本であるか否かは別として，「採集日記」に記載されていない理由は，「採集日記」が後に書き改められた<sup>8</sup>時点で，これらの標本が博物館に所蔵されていなかったためではないだろうか。このように考えられる理由は，明治23年に博物館に所蔵されていた植物標本3,640点が「植物学教授

表2. 「採集日記」にみる小寺の利尻・礼文採集資料

月日	分類	類別番号	品名	産地	理由
20.08.15	軟体	116	バイ貝	礼文郡香深村	助教授小寺甲子氏採集
20.08.15	軟体	117	バイ貝	礼文郡香深村	助教授小寺甲子氏採集
20.08.15	軟体	118	バイ貝	礼文郡香深村	助教授小寺甲子氏採集
20.08.15	軟体	119	バイ貝	礼文郡香深村	助教授小寺甲子氏採集
20.08.15	軟体	120	海扇	礼文郡香深村	助教授小寺甲子氏採集
20.08.15	軟体	121	海扇	礼文郡香深村	助教授小寺甲子氏採集
20.08.16	軟体	122	海扇	礼文郡香深村	助教授小寺甲子氏採集
20.08.16	軟体	123	海扇	礼文郡香深村	助教授小寺甲子氏採集
20.08.16	軟体	124	海扇	礼文郡香深村	助教授小寺甲子氏採集
20.08.16	軟体	125	ブメ 3	礼文郡香深村	助教授小寺甲子氏採集
20.08.16	軟体	126	スナツブ	礼文郡香深村	助教授小寺甲子氏採集
20.08.16	軟体	127	サルアハビ	北見利尻小田泊	助教授小寺甲子氏採集
20.08.16	鉱石	131	石	礼文郡船泊トド嶋	助教授小寺甲子氏採集
20.08.16	鉱石	132	石	礼文	助教授小寺甲子氏採集
20.08.18	魚	113	カザ魚	礼文郡香深村	助教授小寺甲子氏採集
20.08.18	軟体	128	ナマコ	礼文	助教授小寺甲子氏採集
20.08.18	魚	114	アメマス	礼文郡トンナイ	助教授小寺甲子氏採集
20.08.18	土器	357	エムシ	礼文郡トンナイ	助教授小寺甲子氏採集
20.08.18	土器	358	リクトンベ	礼文郡トンナイ	助教授小寺甲子氏採集
20.08.18	哺乳	76	アイヌ骨格女	礼文郡トンナイ	助教授小寺甲子氏採集
20.08.18	動化	109	貝化石	北見宗谷稚内遠藤敷地	
20.08.18	動化	110	貝化石	北見宗谷稚内遠藤敷地	
20.08.19	土器	1918	壺 全体ヲ存スルモノ	北見礼文香深	同所中村倉吉氏寄贈
20.08.19	土器	1919	壺 全体ヲ存スルモノ	北見	同所森弥次郎氏寄贈
20.08.19	石器	1920	雷斧	北見利尻船泊	小寺氏採集
20.08.19	土器	1921	土器片 底ノ部	北見利尻	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1922	土器片 底ノ部	北見利尻	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1923	土器片 底ノ部	北見利尻	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1924	土器片 底ノ部	北見利尻	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1925	土器片 底ノ部	北見利尻	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1926	土器片 底ノ部	北見利尻	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1927	土器片 底ノ部	北見礼文郡香深村	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1928	土器片 縁ノ部	北見礼文郡香深村	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1929	土器片 縁ノ部	北見礼文郡香深村	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1930	土器片 縁ノ部	北見礼文郡香深村	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1931	土器片 縁ノ部	北見礼文郡香深村	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1932	土器片 縁ノ部	北見礼文郡香深村	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1933	土器片 縁ノ部	北見礼文郡香深村	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1934	土器片 縁ノ部	北見礼文郡香深村	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1935	土器片 縁ノ部	北見礼文郡香深村	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1936	土器片 縁ノ部	北見礼文郡香深村	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1937	土器片 縁ノ部	北見礼文郡香深村	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1938	土器片 縁ノ部	北見礼文郡香深村	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1939	土器片 縁ノ部	北見礼文郡香深村	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1940	土器片 縁ノ部	北見礼文郡香深村	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1941	土器片 胴ノ部	北見礼文郡香深村	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1942	土器片 胴ノ部	北見礼文郡香深村	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1943	土器片 胴ノ部	北見礼文郡香深村	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1944	土器片 胴ノ部	北見礼文郡香深村	小寺助教授採集
20.08.19	土器	1945	土器片 底ノ部	北見礼文郡香深村	小寺助教授採集
20.08.19	植化	56	木化石	北見礼文郡尺忍村	小寺助教授採集
20.08.19	植化	57	木化石	北見礼文郡尺忍村	小寺助教授採集
20.08.19	植化	58	木化石	北見	小寺助教授採集
20.08.19	植化	59	木化石	北見	小寺助教授採集
20.08.19	植化	60	木化石	北見	小寺助教授採集
20.08.15	鉱石	133	岩石	北見礼文船泊村ヲソナイ	小寺助教授採集
20.08.15	鉱石	134	岩石	北見礼文	小寺助教授採集
20.08.16	動化	-	木化石	-	小寺助教授採集
20.08.16	動化	-	木化石	-	小寺助教授採集
20.08.19	動化	111	貝化石	-	小寺助教授採集
20.08.19	動化	112	貝化石	-	小寺助教授採集
20.08.19	動化	113	貝化石	-	小寺助教授採集
20.08.19	動化	114	貝化石	-	小寺助教授採集
20.08.19	動化	115	貝化石	-	小寺助教授採集
20.08.19	動化	116	貝化石	-	小寺助教授採集
20.08.19	鉱石	-	岩石	-	小寺助教授採集

上ノ都合ニヨリ本校講堂内<sup>9</sup>」に移管されたように、農学校で充実しつつあった昆虫学教育のために博物館所蔵昆虫標本が移管された可能性があるからである。この点については、北海道大学大学院農学研究科および総合博物館の所蔵標本の調査により明らかになる可能性もあるが、現時点では明らかとする材料を見出し得ていない。今後の課題としておきたい。

昆虫標本以外の採集品について、復命書(表1)と採集日記(表2)を比較しつつ確認することとした。

まず、復命書の「貝類 七品」についてである。「採集日記」中には、バイ貝4点、海扇5点、ブメ1点、スナツブ1点、サルアワビ1点と、該当する可能性のあるものが12点ある。復命書を取りまとめる段階で、複数の標本を一品とみていたとも考えられるが、評価することは難しい。また、後述するように貝類の記載情報が正しいものであるかどうかについても検討する必要がある。

次に、「アメ鱒 三匹」と復命書にはあるが、「採集日記」は1点のみである。これは採集した標本の状態が悪く、1点のみを標本としたのか、3匹を1点の液浸標本としたのか、判断が難しい部分である。また、復命書に確認することができない「カザ魚」が1点増加していることも、相違点として挙げられる。復命書の「沙喫(ナマコ) 三匹」も「採集日記」では1点のみの標本となっており、アマス同様判断が難しい。

「アイノ骨」は「採集日記」の「アイヌ骨格女」とあるものに合致し、「刀ノ鞘」は「エムシ」に、「アイノ女子首飾玉」は「リクトンベ」にそれぞれ該当し、アイヌ民族に関わる資料についての矛盾点はない。

考古資料のうち、土器は復命書では25点(底部8点、縁部13点、胴部4点)収集したことになる。「採集日記」では、完形土器2点、土器片底部8点、縁部13点、胴部4点と27点の記載があり、完形土器2点が追加されていることを除けば問題はない。完形土器についても、表2の原由欄にあるように、中村・森氏からの寄贈品であるため、復命書に記述されなかったとみれば問題ないであろう。また、雷斧(石器)についても復命書、「採集日記」とも1点のみであり合致する。

貝化石は、復命書では「六箇」とあるが「採集日記」では8点である。上述した完形土器と同じく2点が「遠藤敷地」採集とあり、採集品でない可能性もあるものの明確にはならない。植物化石については矛盾は生じない。また、「採集日記」にある「石」・「岩石」は復命書に確認することができず、課題として残る。

以上のように、復命書と「採集日記」の間には検討すべき問題が残されているが、「採集日記」に記載されている標本群は、小寺によって採集され、博物館資料として登録されたものであることは間違いない。これらが現在どのような状況にあるのか、紹介しつつ検討することとした。

## 2. 小寺採集資料の現状

### 1) 考古資料

まず、考古資料の現状について確認したい。小寺の採集資料については、名取(1933)によってわずかではあるが紹介がなされてきたので、最初に確認しておきたい。

名取の報告では、明治20年採集の資料として3点の完形土器が紹介されている。名取の報告は、『史前学雑誌』発表時(名取, 1933)と『著作集』(名取, 1972)の段階で若干変更されており、利用する文献によって指し示す土器が異なるため、まずこの点について整理したい。

#### 『史前学雑誌』

- 五號 礼文島香深村 高さ十一糎、口径十一糎、底径六糎…写真なし
- 六號 礼文島香深村 高さ約六糎、口径約四糎、底径四・五糎…図版第二の5
- 七號 礼文島香深村 高さ九糎、口径凡九糎…図版第二の6

#### 『著作集』

- 五号 礼文島香深村 高さ約六糎、口径約四糎、底径四・五糎…図版の5
- 六号 礼文島香深村 高さ九糎、口径凡九糎…図版の6

七号 礼文島香深村 高さ十一糎，口径十一糎，底径六糎，ラベルに二十年八月十五日，礼文郡香深村産と示されている…第六図B

以上のように、『史前学雑誌』では「五號」とされていた土器が、『著作集』では「七号」となり、「第六図B」として写真が追加されている。写真1-3として該当する資料写真を示す。掲載写真は博物館に所蔵されている名取撮影によるものだが、報告で利用されたものとは異なる（なお、以下の記述において【 】で表記する数字は、北大植物園・博物館で現在利用している資料番号を示す）。

これらはいずれも完形土器として評価されるものであるが、「採集日記」（表2）で確認したように明治20年の採集では2点の受入れ記録が残されているのみである。まずこの点について検討する必要がある。現存するこれらの土器にはすべて礼文島採集という記載がなされており、名取の見解を否定する材料はないが、大沼忠春氏の教示によれば、写真2の「六号」土器【38448】は礼文島採集のものではなく、小寺の採集以前の明治11年に、E. モースが北海道を訪れた際に札幌農学校で見た「小樽の貝塚（手宮）」採集の土器であるという。この土器はモースの著書（モース、1939）にも図として掲載されており、大沼氏はモースの撮影した写真の中にこの土器が含まれていることを確認している。名取も自身の調査の結果を踏まえ、類品の出土が極めてまれであると指摘しており、これが利尻・礼文両島での発掘資料ではないことは間違いない。この土器は、名取が紹介するまでの間に何らかの問題で、採集地情報が誤って付与されたもので、現在資料に付属するラベルの「礼文島採集」という記述は修正されるべきものである。

以上の点から、明治20年に小寺が収集した完形土器は写真1【38449】および写真3【39289】の2点であると考えられるべきである。次に、この両者が「採集日記」記載のいずれに該当するのかについて確認したい。「採集日記」にみるように、当時の博物館では資料を分類し、分類ごとに管理番号（類別

番号）を与えて管理していた。2点の土器のうち、写真3【39289】の底部には朱書きで「1918」という記載が判読しづらいものの存在する。また、現在付属していないが、名取（1972）が引用した資料の写真には、「1918」とも読める記載のあるラベル（写真4は別資料に付属するラベル。以下このラベルをラベル1と表記）が貼り付けられていることが確認され、【39289】が、「採集日記」の類別番号「1918」、つまり中村倉吉氏寄贈によるものであると評価される。しかしながら、この判断にも問題点がないわけではない。名取によれば、当時貼り付けられていたラベルには、「二十年八月十五日、礼文郡香深村産」という記述があり、「採集日記」の「8月19日」という採集日との間に相違がみられるのである。名取が「九」を「五」と読み誤ったか、ラベル作成時の誤記か、「採集日記」自体の記載に問題があるのか、確定することは現時点では困難であるが、いずれにしても小寺の利尻・礼文島調査の際に入手した資料であることは間違いないだろう。写真1の土器【38449】には類別番号の注記は確認できないが、以上の考察から類別番号「1919」の土器、つまり森弥次郎氏の寄贈資料であると評価してよいだろう。

続いて土器片の検討を行う。「採集日記」によれば、小寺が採集した土器片は25点であることが理解されるが、2009年9月現在で「明治20年8月」という採集記録を持つ土器片は【29388】、【29389】、【35774】、【35787】の4点のみであり、これらはいずれも「礼文島香深村，明治20年8月19日採集」という資料情報を持っている。これらの現状について確認してゆきたい。

土器片【29388】には、写真5にみるように、「1945，二十年八月十九日，礼文郡香深村産」という記述のあるラベル1と、写真6にみるような「1480」という記述のあるラベル（以下ラベル2と表記）が付属している。また、土器片そのものにも朱で「1945」という注記がある。土器片【29389】にもラベル1が付属しており、「1944，二十年八月十九日，礼文島香深村産」という記載がある。また、「1479」という記述のあるラベル2の下に「1944」



図1-3. 土器. 1:【38449】礼文島香深村採集, 名取の「五号」資料, 2:【38448】礼文島香深村採集, 名取の「六号」資料, 3:【39289】礼文島香深村採集, 名取の「七号」資料.



図4-6. ラベル. 4: 名取図にみるものと同様のラベル, 5: 土器片【29388】付属ラベル (ラベル1), 6: 土器片【29388】付属ラベル (ラベル1).



図7-9. 土器片とラベルおよび化石. 7:土器片【17836】, 8:土器片【29389】付属の「鴛泊」記載のあるラベル, 9:化石 (穿孔貝の穴)【38863】.

表3. 北大植物園・博物館所蔵 小寺採集土器片の情報とラベルの状態、「採集日記」との照合

現行台帳データ				ラベル・注記			「採集日記」データ	
資料番号	資料名	採集地	採集日	ラベル1 番号	ラベル2 番号	注記	採集地	採集日
35772	土器(壺)	-	-	読めず(1921)	1454	なし	北見利尻	20.08.19
17844	土器片	礼文島香深村	1945.08.19	1922	1455	読めず	北見利尻	20.08.19
17842	土器片	礼文島香深村	1945.08.19	読めず(1923)	1456	読めず	北見利尻	20.08.19
35787	土器片	礼文島香深村	1887.08.19	1925	1458	読めず	北見利尻	20.08.19
17846	土器片	礼文島香深村	1945.08.19	読めず(1926)	1459	1926	北見利尻	20.08.19
35774	土器片	礼文島香深村	1887.08.19	1927	1460	なし	北見礼文郡香深村	20.08.19
17971	土器片	礼文島香深村	1945.08.19	1928	1461	読めず, 2a	北見礼文郡香深村	20.08.19
17976	土器片	礼文島香深村	1945.08.19	1929	1462	読めず, 2c	北見礼文郡香深村	20.08.19
17849	土器片	礼文島香深村	1945.08.19	1931	1464	読めず	北見礼文郡香深村	20.08.19
17972	土器片	礼文島香深村	1945.08.19	1932	1465	1932, 2d	北見礼文郡香深村	20.08.19
17836	土器片	礼文島香深村	1945.08.19	1933	1466	読めず	北見礼文郡香深村	20.08.19
17843	土器片	礼文島香深村	1945.08.19	1934	1467	読めず	北見礼文郡香深村	20.08.19
17973	土器片	礼文島香深村	1945.08.19	1935	1468	読めず, 2b	北見礼文郡香深村	20.08.19
17978	土器片	礼文島香深村	1945.08.19	1936	1469	読めず	北見礼文郡香深村	20.08.19
17847	土器片	礼文島香深村	1945.08.19	1937	1470	読めず	北見礼文郡香深村	20.08.19
17848	土器片	礼文島香深村	1945.08.19	1938	1471	読めず	北見礼文郡香深村	20.08.19
17852	土器片	礼文島香深村	1945.08.19	1939	1472	読めず	北見礼文郡香深村	20.08.19
17974	土器片	礼文島香深村	1945.08.19	1940	1473	なし	北見礼文郡香深村	20.08.19
17845	土器片	礼文島香深村	1945.08.19	1941	1474	読めず	北見礼文郡香深村	20.08.19
17837	土器片	礼文島香深村	1945.08.19	1942	1475	読めず	北見礼文郡香深村	20.08.19
17853	土器片	礼文島香深村	1945.08.19	1943	1476	読めず	北見礼文郡香深村	20.08.19
29389	土器片	礼文島香深村	1887.08.19	1944	1479	読めず	北見礼文郡香深村	20.08.19
29388	土器片	礼文島香深村	1887.08.19	1945	1480	1945	北見礼文郡香深村	20.08.19
17975	土器片	礼文島香深村	1945.08.19	なし	なし	なし	北見礼文郡香深村	20.08.19

という朱の注記がある。土器片【35774】には朱の注記はないが、「1927, 二十年八月十九日, 礼文島香深村産」というラベル1と「1460」というラベル2がある。

以上の3点については、完形土器の場合と同様にラベル1または直接の注記の番号を「採集日記」の類別番号と照合させることが可能で、小寺が採集した土器片であると評価される。

次に、土器片【35787】について検討することとしたい。この土器片には「1925, 二十年八月十九日, 礼文郡香深村産」というラベル1, 「1458」というラベル2, 「礼文香深村, 1 ■■■ 5」という朱の注記, 「八月十九日, 香深村海岸 2」というラベルが付属している。これらの点からすれば、上記3点と変わりはないが、「1925」という番号を「採集日記」と照合すれば、この土器片は「北見利尻」で採集されたことになり、ラベル1の採集地情報との間に矛盾が生じる。この問題については、後述することとしたい。

さて、これら以外の土器資料は現存していないの

だろうか。現行の標本台帳上で「明治20年」という採集情報を持つ考古資料は他に確認できないが、写真7にみる土器片【17836】は、先に確認した土器片と同じ「1933, 二十年八月十九日, 礼文郡香深村産」というラベル1を持つ。またラベル2も同じように付属している。これが、上記4点の土器片と同じ扱いにならない理由は、その採集情報が「昭和20年」8月19日という扱いになっていることにある。

北大植物園・博物館は、130年の歴史の中で、標本管理体制が幾度も変更され、その過程で情報が混乱していることが確認されている(加藤, 2004など)。現行の博物館標本台帳が運用され始めたのは昭和36年であり、再登録された明治時代の資料群には、元号の誤りや採集地の誤認などが散見される。小寺の採集した土器片には、「明治」という記述や採集者としての「小寺」という記載がなされていないため、本来「明治廿年」としなければならぬ採集情報を「昭和20年」と誤って登録してしまったのである。このような問題点を修正す

るためには、台帳情報に安易に依拠することなく、標本・資料に付属するラベルや記述の関連性を確認してゆくことが必要である。以下、小寺の採集と判断される土器片の一覧を提示する(表3)。

表にみるように、「昭和20年」採集として管理されてきた資料も、ラベル1の記載番号が「採集日記」の類別番号と合致することから、「明治20年」に小寺によって採集された資料であると判断される。またラベル2は、所蔵されている民族資料の管理体制について検討(加藤, 2004)した際に確認したように、明治20年代後半から30年代にかけて、採集日記による管理体制の混乱を修正するために利用されたラベルであり、基本的に採集日記の配列順に記載されていると評価できることから、土器片【35772】や【17842】のように「採集日記」の類別番号が判読できない資料についても、ラベル2の番号から「採集日記」のいずれの資料に該当するのかを推測することができる。

表3から、「採集日記」の類別番号1924、1930に該当する資料が現在確認できないことが分かる。現行台帳上、「昭和20年8月19日、礼文郡香深村採集」というデータをもつ土器片【17975】がどちらかに該当するものと考えられるが、これには他の資料にあるラベル1、ラベル2や注記がまったくないため安易に小寺の採集品と位置づけることは難しい。なお、表3注記欄にあるように【17971】には「2a」、【17976】には「2c」といった注記がある。この注記は、名取(1972)第七図に掲載されている土器片写真の脇にある記述と合致し、名取によって記載されたものであることが山谷文人氏によって確認されている。

ただし、確認されたこれらの資料にも問題がある。【35787】で触れたように、「採集日記」では利尻で収集されたとされる類別番号1921～1926に該当する資料すべてに礼文郡香深村というラベル1が付属しており、その情報の信頼性に疑わしい部分がある。また、採集日記の類別番号1944に該当する【29389】について詳細に検討すると、写真8のように、「鴛泊」と判読できる記述のあるラベルの断片が確認でき、同様に類別番号1945に該当する

【29388】にも同じラベルが確認される。大沼氏の教示によれば、これら2点の土器は礼文島で発掘されるべきものではなく、利尻島で発掘される様式のもので、ラベル1よりも断片として残る「鴛泊」の記述の方が妥当であると判断されるのである。

以上のように、小寺の採集した土器資料については、資料群全体として明治20年に利尻・礼文島で採集されたものと評価できるが、現行の標本台帳や付属するラベル情報については、採集から博物館に持ち帰った段階、資料の登録からのちの管理段階の様々な段階で情報が錯綜しているものとみられ、利用に際しては慎重な取り扱いが必要である。

次に、「採集日記」類別番号1920、北見利尻鴛泊採集の「雷斧」、石斧についてであるが、現行台帳では、明治20年ないし昭和20年に利尻島ないし礼文島採集記録を持つ石器資料は確認できず、またラベル1に「1920」という記載をもつ石器も現時点で確認できていない。今後の課題としておきたい。

## 2) アイヌ民族関係資料

次に、アイヌ民族関係資料について確認することとしたい。明治期に収集されたアイヌ民族資料について別稿(加藤, 2004)で詳細に検討したように、「採集日記」類別番号357の「エムシ」は、「(357)、エムシ」という記述のあるラベル1が付属する鞆【38513】(礼文郡香深村、明治20年8月16日)に該当する<sup>10</sup>。類別番号358のリクトンベは現在のところ該当する資料を見出し得ていない。類別番号76の「アイヌ骨格女」はラベル1に「76」の記載のある人骨【36570】(礼文香深村、明治20年8月16日)に該当するが、鞆【38513】とともに、「採集日記」の採集日との間に齟齬がある。

これらの資料はいずれも発掘品と考えられ、考古資料の収集時に偶然発見されたものと推測される。

## 3) 軟体動物

貝類【12236】はラベル1に「116、20年8月15日、礼文郡香深村」という記載があり、「採集日記」類別番号116の「バイ貝」に該当する。しかし、

軟体動物類については以下に述べるようにラベル1の記載番号による照合には問題があり、検討を要する。明治20年8月収集というデータをもつ貝類標本は以下のものである。

- ・貝類【34720】：現行台帳上には「明治20年8月15日、礼文」という記載はあるが、ラベル・注記なし
- ・貝類【34721】：ラベル1に「114、20年8月15日、礼文郡香深村」
- ・貝類【34722】：ラベル1に「110、20年8月15日、礼文郡香深村」
- ・貝類【34726】：ラベル1に「■■■3 (113カ)、20年8月15日、礼文郡香深村」
- ・貝類【34740】：ラベル1に「111、20年8月15日、礼文郡香深村」

以上のように、「採集日記」に確認することのできない類別番号が用いられており、【12236】の「116」という類別番号の合致のみをもって、「採集日記」記載標本と現存標本とを照合させることは問題がある。この類別番号は、「採集日記」の貝化石のものと合致するが、これらの資料を化石と位置づけることはできず、なぜこのような状況になっているのか判然としない。先にみたように、利尻採集の土器片に礼文採集というラベル1が付与されるなど、ラベル1と「採集日記」の間での混乱があることから、受入れの段階で化石と現生の貝類標本が混乱したのだろうか。

#### 4) 魚類

魚類標本については、現存標本に該当するものを見出し得ていない。

#### 5) 化石類、岩石・鉱物類

「採集日記」類別番号109~116の貝化石は現存標本で確認することができない。類別番号が合致する現生貝類標本については上述したとおりである。類別番号56-60の木化石に該当する可能性のあるものは以下の標本である。

- ・化石【42529】：ラベル1に「56、20年8月19日、礼文郡香深村」、注記として「モトチ海岸礼

文島」、 「56」がある

- ・化石【42530】：ラベル1に「57、20年8月19日、礼文郡香深村」、注記として「モトチ海岸礼文島」、 「57」がある
- ・化石【42531】：ラベル1に「58、20年8月19日、礼文郡香深村」、注記として「モトチ海岸礼文島」、 「58」がある

以上のように「採集日記」類別番号に合致する標本が確認される。しかし、化石【42526】には、ラベル1に「64、20年8月19日、礼文郡香深村」、注記として「64」という記載があり、これは「採集日記」に合致しない。これらも貝類、土器片と同様に検討を要する。

岩石・鉱物類では、化石(穿穴貝の孔)【38863】(写真9)のラベル1に「■■■■ (133カ)、20年8月15日、礼文郡船泊村」という記載があり、これは「採集日記」類別番号133の岩石に合致する可能性がある。その他の類別番号を持つ資料は、現存資料中に確認することができない。

### 3. 明治20年 吉川昌則による鳥類標本採集

小寺の採集が行われた明治20年に、吉川昌則という人物が利尻・礼文島の調査を行っている。北大大学文書館に所蔵されている履歴によれば、吉川は明治9年から11年にかけて内務省博物館の田中房種の下で鳥獣剥製の製作法を学んだのち、明治21年まで札幌博物場、札幌農学校所属博物場で標本作製を主な職務として勤務していた人物である。小寺と同様に、吉川の出張についても史料が残されているので、紹介することとしたい。

〔史料4 明治20年9月23日付 吉川昌則出張届〕

出発御届

鳥類採集ノ為利尻礼文方面出張被命本日出発仕候間、御届申上候也

明治二十年

九月廿三日

雇 吉川昌則 (印)

札幌農学校幹事 佐藤昌介殿<sup>11</sup>

〔史料5 明治20年11月1日付 吉川昌則任届〕

帰任御届

鳥類採集ノ為利尻礼文二島へ出張被命、九月廿三日  
出発仕候處、御用相済本日帰札仕候間、此段御届申  
上候也

明治二十年

十一月一日 雇 吉川昌則 (印)

農学校長代理

幹事 佐藤昌介殿<sup>12</sup>

ここにみるように、博物場の雇であった吉川昌則は、明治20年9月から11月にかけて利尻・礼文両島へ鳥類採集を目的として出張していた。この出張については、あらかじめ9月15日付で小寺から佐藤昌介に対して伺い<sup>13</sup>が出されており、小寺が考古・昆虫採集、吉川が鳥類採集と役割を分担して収集計画を立案していたものと推測される。

吉川の採集標本についても復命書<sup>14</sup>が現存しており、その全容を把握することができる。表4左にみる鳥類標本35点、考古資料1点、石炭2点、貝類1点、魚類1点、植物標本7種が吉川の採集標本である。小寺の場合と同様に、「採集日記」と照合することとした。

表4の中央に、復命書に対応する「採集日記」の記載を掲げた。アスタリスクのついた項目は復命書と合致しない情報である。合致しない理由は、類別番号542のタカブガモの採集日を「8月4日」と記載すべきところを誤って、5日と記載し、10日採集の標本で修正されるまで記載がずれてしまったこと、また、類別番号552キマハリの採集地を「石崎村」と記載すべきところを「小田泊」を余分に記載してしまい、以降の記述がずれてしまったためである。このような誤りは、もともと存在していた台帳を転記する際に、個々の標本ごとに転記するのではなく、採集日、採集地ごとに転記したために生じた誤記であると考えられる。このほかの部分でも年代がずれている場合があるなど、「採集日記」の記述をそのまま信頼することは難しい部分があるが、

復命書に記載のない「ヲタマリ (小田泊)」といった字名の記載があるなど古い台帳に記載のあった情報を得られるという点では有益であろう。

「復命書」と「採集日記」の照合から、「植物乾さく葉 七種」以外はすべて博物館に受入れられていたことが確認された。植物標本はおそらく明治23年の博物館所蔵植物標本が農学校本校に移管された際にあわせて移管されたか、もしくは当初から本校に所蔵することとなったものだろう。

小寺採集標本と同様に、吉川の復命書および「採集日記」に記載されている標本と現存標本との照合を行うこととする。現行の標本台帳には、吉川の採集時期である明治20年10月に利尻・礼文で採集された標本は多数存在する。しかし、「採集日記」と現存標本との照合には留意すべき点がある。別稿(加藤, 2004; 加藤ら, 2009)や小寺採集の土器片付属ラベル2の存在で確認したように、「採集日記」の類別番号による資料管理は明治時代の中期に廃止されており、類別番号が抹消されていたり、新しいラベルによって利用できなくなっていたりしている。土器資料の場合、注記が確認できる場合があることや、ラベル1が貼り付けられているため、「採集日記」の類別番号と照合することができる。しかし、鳥類標本の場合、標本ラベルは脚部に結び付けられているため、新しい管理体制に移行した際に「採集日記」の類別番号が記載されたラベルが取り外され、新しい管理番号しか確認することができず、照合することができない。しかし、土器片付属のラベル2の番号のように、新しい管理体制も「採集日記」の管理体制を引き継いだものであり、管理番号の配列から推測することはできる。表4右に、明治中期に再編集された鳥類標本台帳における吉川採集標本を掲げた。照合結果から新しい管理番号は「採集日記」の類別番号とは合致しないものの、配列は同様であることが分かる。なお、「採集日記」の類別番号558シマウカラに該当するものは、新しい標本台帳中に確認できず、早い時期に失われたものと考えられる。

新しい標本台帳の管理番号は、写真10にみるラベル(ラベル3)に記載されているものである。この番号

表4. 吉川昌則復命書, 「採集日記」, 明治期標本台帳と現行標本の照合

明治二十年九月利尻礼文二島出張中採集品		「採集日記」				明治期標本台帳						
品名	月日	産地	類別番号	品名	採集年次	産地	原由	台帳№	台帳品名	台帳採集地	台帳採集日	現行 標本番号
タカアガモ ♀	十月四日	利尻郡鬼脇村	541	タカアガモ♀	1887.10.04	北見利尻郡鬼脇村ヲタトマリ	吉川昌則採集	464	ヒドリ♀	北見利尻郡鬼脇村	1887.10.14*	[6777]
全	全	全	542	タカアガモ♀	1887.10.05*	北見利尻郡鬼脇村ヲタトマリ	吉川昌則採集	465	ヒドリ♀	北見利尻郡鬼脇村	1887.10.14*	[6767]
アカケラ 啄木鳥 ♀	全 五日	全	543	アカガラ♀	1887.10.06*	北見利尻郡鬼脇村ヲタトマリ	吉川昌則採集	466	アカガラ♀	北見利尻郡鬼脇村	1887.10.05	[4519]
ペニマシコ	全 六日	全 仙法志村	544	ペニマシコ♀	1887.10.06*	北見仙法寺村	吉川昌則採集	467	ペニマシコ♀	北見利尻郡仙法志村	1887.10.06	[2553]
タカアガモ ♂	全	全	545	タカアガモ♂	1887.10.07*	北見仙法寺村	吉川昌則採集	468	ヒドリガモ♂	北見利尻郡仙法志村	1887.10.06	[6778]
ミノサハイ 鷓鴣	全 七日	全	546	ミノサハヒ	1887.10.08*	北見仙法寺村	吉川昌則採集	469	ミノサザイ	北見利尻郡仙法志村	1887.10.07	[2140]
トモエカモ ♀	全 八日	全 鷺泊村	547	トモエガモ♀	1887.10.09*	北見鷺泊村	吉川昌則採集	470	シノリガモ♀	北見利尻郡鷺泊村	1887.10.08	[6713]
全	全 九日	全	548	トモエガモ♀	1887.10.10*	北見鷺泊村	吉川昌則採集	471	シノリガモ♀	北見利尻郡鷺泊村	1887.10.09	[6715]
キマワリ ♂	全 十日	全 鬼脇村	549	キマハリ♂	1887.10.10	北見鬼脇村	吉川昌則採集	472	キマハリ♂	北見利尻郡鬼脇村	1887.10.10	[832]
ミノサハイ ♂	全	全	550	ミノサハヒ♂	1887.10.10	北見鬼脇村	吉川昌則採集	473	ミノサザイ♂	北見利尻郡鬼脇村	1887.10.10	[2141]
マカモ 鳧 ♂	全 十二日	全	551	マガモ♂	1887.10.12	北見鬼脇村	吉川昌則採集	474	マガモ♂	北見利尻郡鬼脇村	1887.10.12	[6613]
ツクミ ♂	全 十二日	全 鬼脇村	552	ツクミ♂	1887.10.12	北見字小田泊*	吉川昌則採集	475	チヨウマ♂	北見利尻郡鬼脇村	1887.10.12	[2269]
マガモ 鳧 ♂	全 十三日	全	553	マガモ♂	1887.10.13	利尻郡鬼脇村小田泊		476	マガモ♂	北見利尻郡鬼脇村	1887.10.13	-
タカアガモ ♂	全 十四日	全	554	タカアガモ♂	1887.10.14	利尻郡鬼脇村小田泊		477	ヒドリガモ♂	北見利尻郡鬼脇村	1887.10.14	[6781]
キマワリ ♂	全	全	555	キマワリ♂	1887.10.14	利尻郡鬼脇村小田泊*		478	キマハリ♂	北見利尻郡石崎村	1887.10.14	[850]
ヒガラ	全	全	556	ヒガラ	1887.10.14	利尻郡石崎村		479	コガラ	北見利尻郡石崎村	1887.10.14	[463]
アカツバラ ♀	全 十五日	全 鬼脇村	557	アカハラ♀	1887.10.15	利尻郡石崎村*		480	ハチヤクウツクミ♀	北見利尻郡鬼脇村	1887.10.15	[1621]
シチウカラ 四十雀 ♂	全	全	558	シチウカラ♂	1887.10.15	利尻郡鬼脇村						
カンラダカ ♂	全	全	559	カンラタカ♂	1887.10.15	利尻郡鬼脇村		481	カンラタカ♂	北見利尻郡鬼脇村	1887.10.15	-
全 ♂	全	全	560	カンラタカ♂	1887.10.15	利尻郡鬼脇村		482	カンラタカ♂	北見利尻郡鬼脇村	1887.10.15	[6313]
ハシフトカラス 鳥鴉	全 十八日	全 礼文郡香深村	561	ハシフトカラス	1887.10.15	利尻郡鬼脇村		483	ハシフトカラス	北見利尻郡鬼脇村	1887.10.15	[9087]
トモエカモ ♀	全	全	562	トモエガモ♀	1887.10.18	礼文郡香深村*		484	シノリガモ♀	北見利尻郡香深村	1887.10.18	[6725]
全 ♂	全	全	563	トモエガモ♀	1887.10.18	礼文郡香深村		485	シノリガモ♀	北見利尻郡香深村	1887.10.18	[7475]
シクヒ 鴻 ♂	全	全	564	トモエガモ♂	1887.10.18	礼文郡香深村		486	シノリガモ♂	北見利尻郡香深村	1887.10.18	[6717]
全	全 十九日	全 船泊村	565	ヒシクヒ♂	1887.10.19	礼文郡香深村*		487	ヒシクヒ♂	北見利尻郡鷺泊村	1887.10.19	-
全	全	全	566	ヒシクヒ♂	1887.10.19	礼文郡鷺泊村		488	ヒシクヒ♂	北見利尻郡鷺泊村	1887.10.19	[6706]
シモフリハジロ ♂?	全 廿日	全	567	シモフリハジロ♂	1887.10.20	礼文郡鷺泊村		489	ナキハジロ♂?	北見利尻郡鷺泊村	1887.10.20	[6756]
トモエカモ ♂	全 廿七日	全 香深村	568	トモエガモ♂	1887.10.20	礼文郡鷺泊村		490	シノリガモ♂	北見利尻郡鷺泊村	1887.10.20	[6728]
セグロセキレイ ♂	全	全 尺忍村	569	セグロセキレイ♂	1887.10.27	礼文郡香深村*		491	セグロセキレイ♂	北見利尻郡香深村	1887.10.27	[676]
全 ♂	全 廿八日	全 香深村	570	セグロセキレイ♂	1887.10.28	礼文郡尺忍村*		492	セグロセキレイ♂	北見利尻郡尺忍村	1887.10.27	[660]
オハム ♂	全	全	571	オホハム♂	1887.10.28	礼文郡尺忍村*		493	オホハム♂	北見利尻郡香深村	1887.10.28	-
千鳥一種 ♂	全	全	572	千鳥?♂	1887.10.28	礼文郡香深村		494	クサシギ	北見利尻郡香深村	1887.10.28	[5541]
シチウカラ 四十雀	全	全	573	シウカラ	1887.10.28	礼文郡香深村		495	シウカラ♀	北見利尻郡香深村	1887.10.28	[260]
ワタリカラス 渡り鴉	全 三十日	全	574	ワタリカラス	1887.10.30	礼文郡香深村		496	ワタリカラス	北見利尻郡香深村	1887.10.28*	[7057]
トモエカモ ♂	全 三十一日	全	575	トモエガモ♂	1887.10.31	礼文郡香深村		497	シノリガモ♂	北見利尻郡香深村	1887.10.31	[6733]
雷奔	全	全	1946	雷奔		礼文郡香深村						
石炭 二個	全 廿七日	全	59	石炭		礼文郡尺忍村*						
全	全 十九日	全 船泊村	60	石炭		礼文郡尺忍村*						
アブラ貝	全 十九日	全 船泊村	130	アブラ貝		礼文郡鷺泊村						
ハツガラ ソイ魚一種	全	全 香深村	115	ソイ		礼文郡香深村						
植物乾さく葉 七種												

\*は照合の結果, 採集情報に混乱がみられるもの

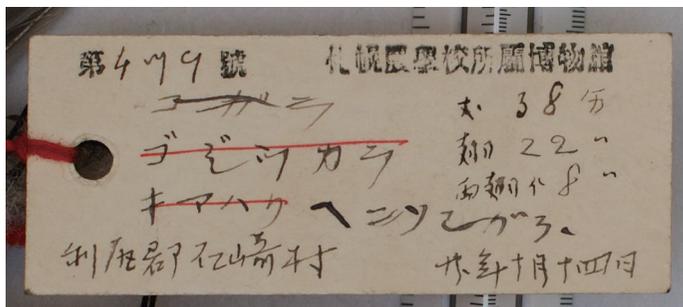


図 10. コガラ【463】付属のラベル. 479 号とある.

は、現行の標本台帳に反映されていないため、北大植物園・博物館の全標本について当該ラベルの有無、記載番号の確認を行い、照合した結果を表 4 の右端に示した<sup>15</sup>。新しい標本台帳の管理番号 464 および 465 のヒドリガモは 10 月 14 日採集となっているが、該当する標本の付属ラベルは「4 日」という記載があり、台帳転記時の誤記と考えられる<sup>16</sup>。また 496 のワタリガラスも 28 日とあるが、標本付属ラベルでは「卅日」と記載があり、これについても台帳の誤記である。現行の標本台帳では、最も信頼される標本ラベルや復命書の情報にもとづいて管理しているが、誤った情報が記載されたラベルが付属していることや、過去の標本管理台帳に誤りがあることについては、留意が必要である。

以上の照合から、現在 4 点の標本が確認できないことが分かる。このうち、類別番号 571、管理番号 493 のオオハムは、1909 年に標本交換でアメリカ自然史博物館に送られた標本に含まれる AMNH95586 アビ (Rebun, Oct. 1886) に該当するものと推測される<sup>17</sup>。

鳥類標本以外の雷斧、石炭、アブラ貝、ソイについては現存が確認できていない。

#### 4. 博物館関係者以外の調査について

名取 (1933) が述べるように、北大植物園・博物館関係者の利尻・礼文調査は小寺および吉川の実地調査ののち、明治 41 年の八田三郎まで途絶える。しかし、この間も札幌農学校関係者によっていくつかの資料が収集され、博物館に収められている。ここでは、それらの収集者と資料について紹介すること

としたい。

##### 4-1. 明治 20 年 堀正太郎による植物標本採集

小寺甲子二とほぼ同じ時期に、野澤俊次郎 (研究生)、石川貞治 (七期生) から農学校関係者が北海道内各地で標本採集にあたっており、堀正太郎 (七期生) も宗谷地方で植物標本の採集にあっていた。堀の復命書<sup>18</sup>である「A Catalogue of plant specimen, collected Riishiri, Rebun and western coast of Hokkaido in August 1887, arranged in the order of natural classification」によれば、821 点の植物標本と 7 点の動物化石を採集したことがわかる。堀の採集標本は、北海道大学総合博物館に所蔵されている<sup>19</sup>ため、詳細については本稿では触れないが、明治 29 年 10 月 31 日に行われた札幌博物学会第 56 回月次会で宮部金吾が「利尻山植物の特性」として講演を行った際に、堀正太郎、石川貞治、伊藤有、フォーリー、広瀬渡らの採集植物標本を用いていた<sup>20</sup>こと、また川上 (1900) がとりまとめた利尻島における植物採集の歴史において「鬼脇附近ヨリ利尻山ニ登リテ其半腹上ハイマツ林ニ達シ」た堀の調査はその嚆矢とされている<sup>21</sup>ことを紹介しておく。

##### 4-2. 石川貞治収集資料

札幌農学校七期生の石川貞治は、利尻島における考古学に関する最初の文献の著者とされている (利尻町史編集室, 2000)。石川は農学校卒業後、北海道庁地質鉱山係として採用され、明治 21 年から 24 年にかけて行われた北海道新鉱物調査事業に携

わった人物である(杉浦, 1993)。石川の収集による北大植物園・博物館所蔵の利尻・礼文島資料は下記の2点である。

- ・土器片【17969】 礼文オションナイ
- ・アイヌ頭蓋骨【36572】 礼文島北端 明治22年10月

石川は、小寺・堀・吉川らと同じく明治20年に北海道北部沿岸地方の地質調査および鉱物採集を行っていた<sup>22</sup>。復命書によれば、石川は8月3日に増毛から利尻礼文に寄港し、5日には納沙布岬頭稚内村に上陸しており、明治20年には利尻・礼文島の調査は実施していないようである。神保(1892)による地質報文には石川が明治22年に利尻・礼文島の調査を行ったことが記されており、アイヌ頭蓋骨【36572】の収集日である10月に実施されたものだろう。土器片【17969】には採集日の記載がないが、おそらく同時期の採集であると推測される<sup>23</sup>。

#### 4-3. 川上瀧彌収集標本

石川採集品ののち、博物館に受入れられた利尻・礼文島採集資料は、以下のものである。

- ・ハギマシコ【2607】: 明治31年8月, 利尻山上, 川上, (3羽)
  - ・ハギマシコ【2583】: 利尻山上, 川上
  - ・ハギマシコ【2584】: 利尻山, 川上
- 【2583】、【2584】には採集日の記載がないが、【2607】の「3羽」という記述と共通の採集情報から一連の標本と評価してよいだろう。これらの標本の採集者である「川上」は植物学者の川上瀧彌と考えられる。川上は明治32年7月20日から9月4日まで、利尻島、特に利尻山を中心に植物採集を行っていた(川上, 1900)。しかし、標本付属の「川上」が川上瀧彌であるとするならば、採集年が「明治31(1898)年」であることに問題が生じる。この点について検討してみたい。

北大植物園・博物館に所蔵されている古い台帳・カード類のうち、1930年代に利用されていた標本カードにこれら3点のハギマシコの記載を確認することができるが、当該標本のカードには採集日の

記載がない。一方、1901年末にまとめられた博物館所蔵鳥類標本の一覧(種ごとに採集年次別の標本点数をまとめたもの)のハギマシコの欄には、明治31・32年採集の標本が記載されていない。これらのことから、3点のハギマシコは採集直後に受入れられたものではなくのちに受入れられたために、もともとの採集年次があいまいになっているのではないかと推測される。北海道大学総合博物館に所蔵されている川上の採集による利尻島植物標本は確認した限りでは明治32年採集のみであり、ハギマシコ【2607】の「明治31年」は「明治32年」の誤りと考えるべきであろう。

#### 4-4. クロッケ採集標本

このほか、明治期に採集された標本には以下のものがある。

- ・【971】モズ: 利尻, 明治36年8月, クロッケ
- ・【685】ハクセキレイ: 利尻, 明治36年8月, クロッケ
- ・【6753】スズガモ: 利尻, 明治36年8月, クロッケ

これらの標本の採集人物であるクロッケは、明治37年に「Tiergeographische Studien ber Hokkaido. (Klocke, 1904)」という論文を発表したEduard Klockeだと考えられる。博物館との関係は定かではないが、動物学者の八田三郎との交友関係によるものではないかと考えられる。標本採集の目的など、詳細については今後の課題としておきたい。

#### 5. 明治41年 八田三郎の調査

名取(1933)は、明治41年に行われた八田三郎と柳川秀與の調査は史前学的調査という。しかしながら、北大植物園・博物館にはこの調査に関連する資料が所蔵されていない。八田三郎由来の利尻・礼文島関連資料は、採集日不明、礼文島採集の2点のアイヌ頭骨【11511】、【11513】のみである。このほかには、熊の渡海について明治45年に八田が報告(八田, 1912)した事例が知られているが、これも史前学的調査とは言い難い。柳川も畜産学科を卒業する学生<sup>24</sup>であり、現時点で名取の述べる事

項について明らかとする材料を得ていない。

## 6. 昭和7年 名取武光・後藤寿一による調査

冒頭で紹介したように、昭和7年に実施された名取武光と後藤寿一による調査は、利尻・礼文両島の遺跡について詳細に報告した最初のものといえる。この調査結果は、調査報告（名取1933）および紀行（名取・後藤1933）として報告されている。

北大植物園・博物館に残されている本調査に関連する資料は、名取が撮影した写真（ガラス乾板）と採集した遺物である。これに加えて、北広島市教育委員会が所蔵する後藤寿一資料に、本調査に関する後藤のノート、写真などが含まれている。これらの資料について紹介してゆきたい。

### 1) 写真資料および後藤資料

名取の撮影によるものと考えられる写真資料は、博物館に多数残されている。現在、これらは整理作業中であるが、昭和7年に実施された利尻・礼文島調査及び報告執筆時に撮影されたと思われるものは、写真11～45の30枚である<sup>25</sup>。これらの中には名取（1933）に掲載されているものもあるが、印刷されたものよりもより精細な形で利用できること、また公表されていないペシ岬付近の様子など、考古学調査資料としての価値だけでなく、利尻・礼文両島の歴史資料としても意義のあるものとして位置付けられる。なお、写真22及び23は博物館での保存用包紙に「江別」と記載があるが、後藤寿一資料に同一の写真が含まれていることから、いずれかの時点で情報に混乱が生じたものと考えられる。

後藤資料にはここに挙げた写真のほか、「香深沖の昆布採」、「礼文島香深のチャシウシノチャシ（側面ヨリ）」、「礼文島香深のチャシウシノチャシ（海二面シタ所）」、「礼文島船泊村、柳谷初太郎氏蔵」の土器写真3枚、「礼文島オションナイ、関正氏撮影」の土器写真3枚、「礼文島船泊」の骨器類写真（写真19に類似）、「香深井墓地」の土器写真が含まれている。なお、後藤資料の「香深井墓地」土器写真は名取（1933）の「第一図の3」であり、博物館に残されてしかるべき写真であるが、現時点で確認



11

12

13

図11-13. 土器. 11:名取第一図の1, 礼文島船泊村字神崎, 礼文島神崎小学校前(後藤資料記載), 12:名取第一図の2, 礼文島船泊村字神崎第一の沢, 第一ノ沢(後藤資料記載), 13:名取第一図の4, 礼文島船泊村字神崎第一の沢, 第一ノ沢(後藤資料記載)。



図 14. 名取第二図. 利尻島鴛泊市街地の一部とペシ岬の遠望.



15	16
17	

図 15-17. 風景写真. 15: 名取第三図, スコトン岬より船泊湾及び船泊村を望む, 16: 名取第四図, 香深井軍の拠ったと言ふ大沢コタン, 17: 名取第五図, 増毛軍の拠ったと言ふチャシウシ附近の丘陵.



18	19
	20

図 18-20. 出土物の写真. 18:名取第七図, 1c は【17868】, 2a は【17971】, 2b は【17973】, 2c は【17976】, 2d は【17972】, 19:名取第十図, 20:名取第十一図.



図 21. 鴛泊ベシ岬上り口ヨリ鴛泊市街ヲ望ム, 中央ノ道路開鑿ノ際土器人骨出土 (後藤資料記載).

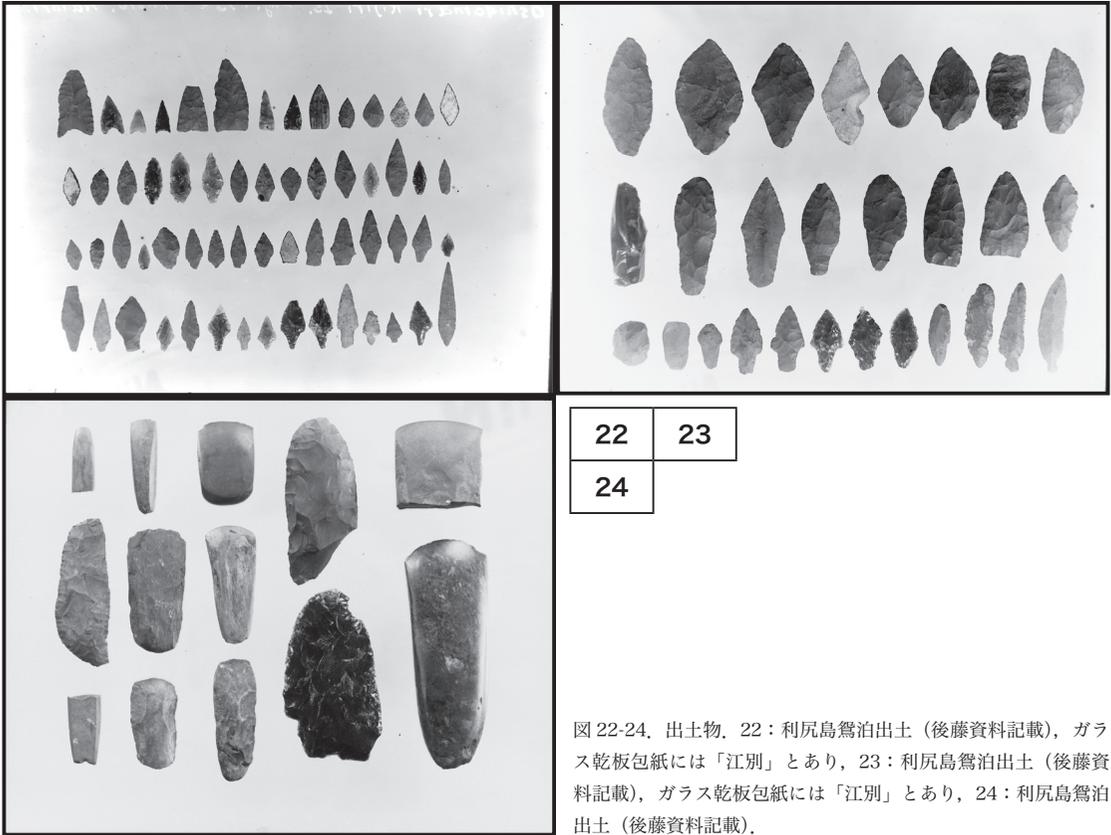


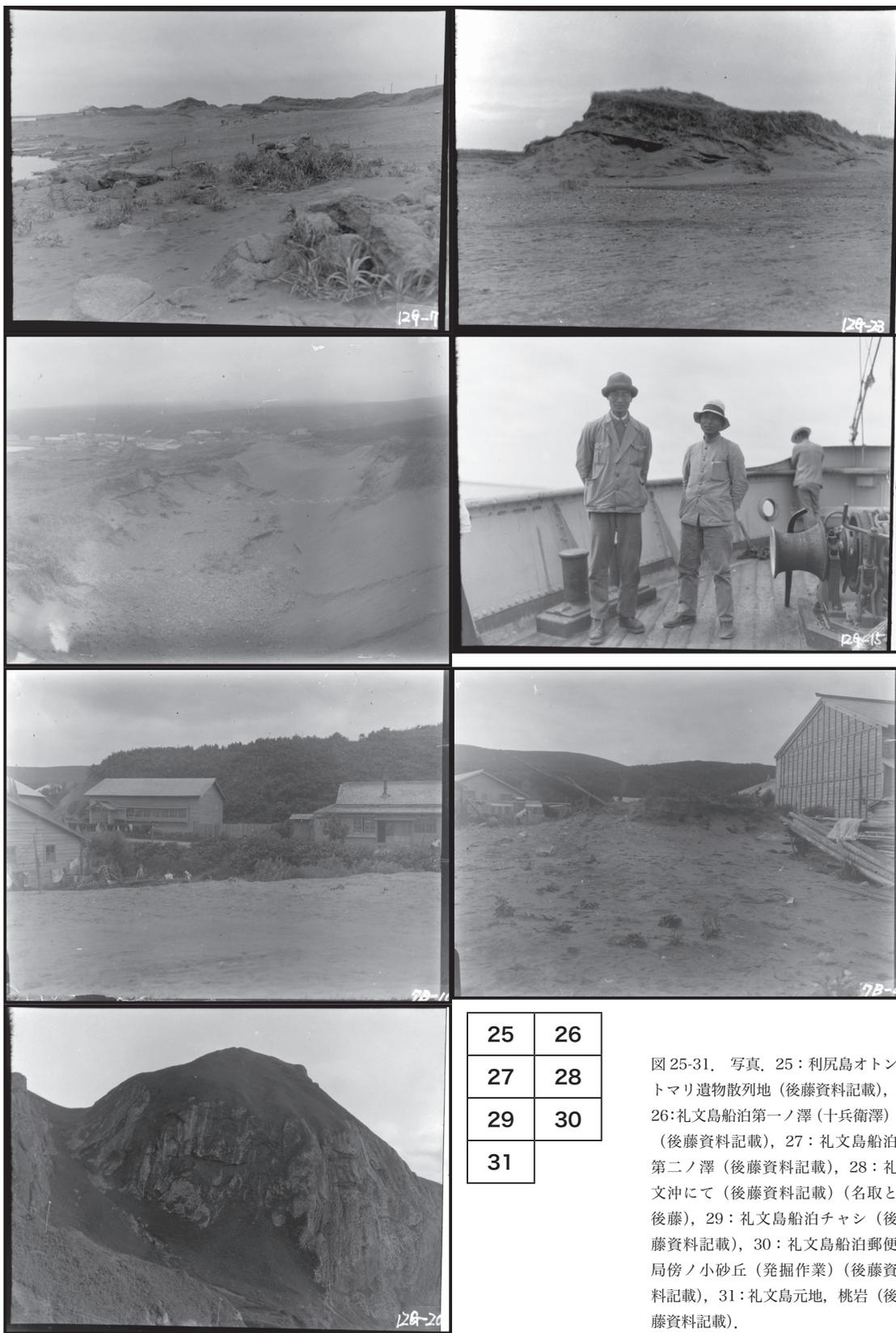
図 22-24. 出土物. 22: 利尻島鴛泊出土 (後藤資料記載), ガラス乾板包紙には「江別」とあり, 23: 利尻島鴛泊出土 (後藤資料記載), ガラス乾板包紙には「江別」とあり, 24: 利尻島鴛泊出土 (後藤資料記載).

表 5. 北大植物園・博物館所蔵 名取採集遺物資料点数

採集地名	石器点数	土器点数	土器片点数	骨器点数	貝製品点数	人頭骨片点数	計
利尻・礼文	0	0	19	0	28	0	47
利尻島	8	1	0	0	0	0	9
利尻鬼脇	0	0	0	19	0	1	20
利尻オタトマリ	16	6	138	1	0	0	161
利尻鴛泊・ペシ岬	7	1	100	0	0	0	108
利尻オトントマリ	13	0	27	0	0	0	40
礼文島	3	0	3	0	0	2	8
礼文香深	2	0	1	0	0	0	3
礼文香深井	26	5	160	0	0	0	191
礼文船泊	0	0	1	0	0	0	1
礼文船泊神崎	22	1	119	0	0	0	142
礼文船泊神崎第一の沢	64	1	61	0	0	0	126
礼文船泊神崎第二の沢	5	0	12	0	0	9	26
礼文船泊神崎第三の沢	0	0	22	0	0	0	22
礼文オションナイ	1	0	34	0	0	0	35
礼文テフネフ	1	0	2	0	0	0	3
計	168	15	699	20	28	12	942

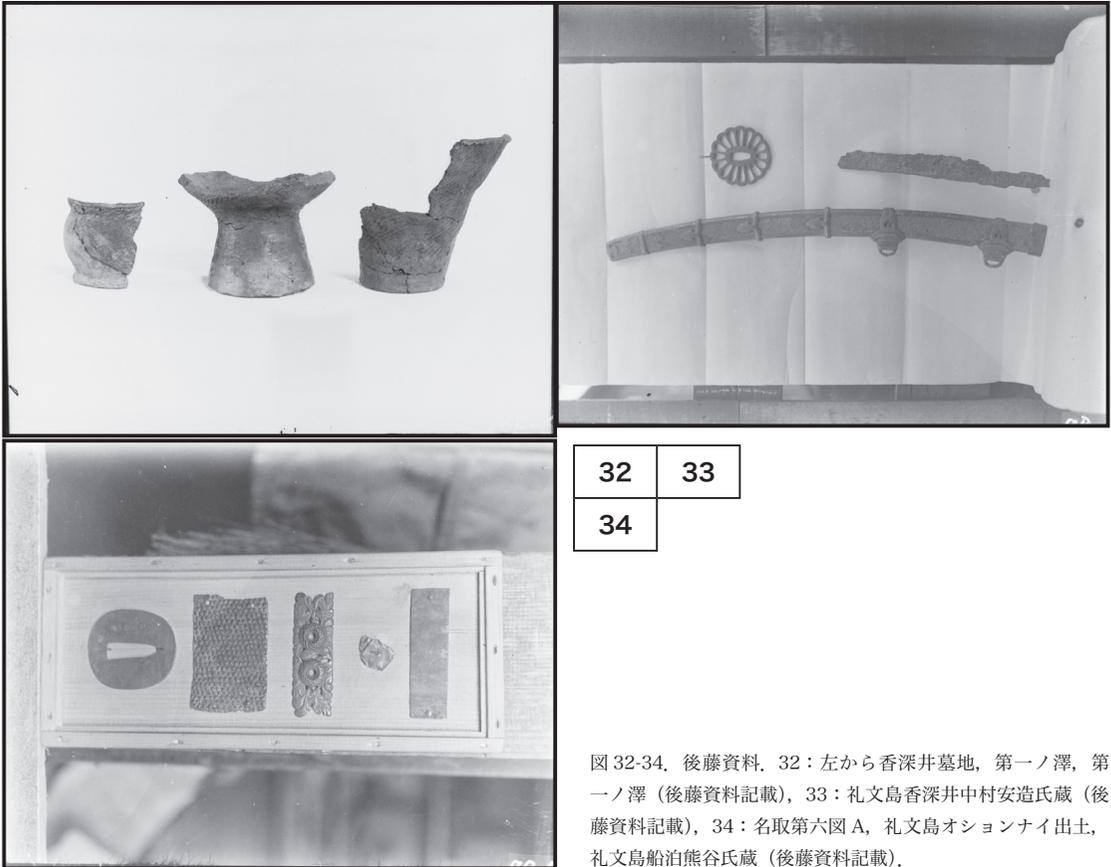
採集地名は、遺物に記載のあるものを原則としているが、個別に記載がなく保管箱に「利尻・礼文」とあるものについては、個々を判別することができないため、まとめて採集地とした。

資料点数は博物館の管理番号に基づく、複数の土器片に一つの管理番号が付与されている場合には1点とカウントされるため、厳密な採集点数ではないことに留意されたい。



25	26
27	28
29	30
31	

図 25-31. 写真, 25: 利尻島オトン  
トマリ遺物散列地 (後藤資料記載),  
26: 礼文島船泊第一ノ澤 (十兵衛澤)  
(後藤資料記載), 27: 礼文島船泊  
第二ノ澤 (後藤資料記載), 28: 礼  
文沖にて (後藤資料記載) (名取と  
後藤), 29: 礼文島船泊チャシ (後  
藤資料記載), 30: 礼文島船泊郵便  
局傍ノ小砂丘 (発掘作業) (後藤資  
料記載), 31: 礼文島元地, 桃岩 (後  
藤資料記載).



32 33

34

図 32-34, 後藤資料, 32: 左から香深井墓地, 第一ノ澤, 第一ノ澤 (後藤資料記載), 33: 礼文島香深井中村安造氏蔵 (後藤資料記載), 34: 名取第六図 A, 礼文島オションナイ出土, 礼文島船泊熊谷氏蔵 (後藤資料記載)。

することができない。

後藤の調査ノートは、調査報告 (名取, 1933) および紀行 (名取・後藤, 1933) の内容とほぼ同様であるが、手書きの地図なども含まれており、有益である。あわせて参照されたい。

## 2) 採集遺物

名取・後藤の調査によって得られた遺物は博物館に多数保存されている。これらを適切に分類して検討することは筆者の能力の範囲を超えているため、本稿では採集地ごとの資料点数のみ表5にまとめ、紹介するにとどめたい。名取は遺跡ごとの概要、主要遺物について報告を行っているが、その全容については必ずしも明確ではなかった。表にみるように1,000点弱の採集資料が確認され、利用できる体制が整っている。

## おわりに

札幌農学校から北海道帝国大学の時代にかけて利尻・礼文島で収集され、北大植物園・博物館に所蔵されている資料は、今回紹介したものとなる。明治20年採集資料を中心に、長い年月の間に情報が混乱していることが確認された。煩雑な考証を繰り返したにもかかわらず、混乱している情報の修正について多くの課題を残してしまっただが、今後の利用にあたって留意すべき情報を整理することはできたのではないかと考えている。

筆者の力不足により、各分野の資料の価値というところまで踏み込むことができなかったが、本報告の資料紹介を機に、利用が促進されてゆくことで資料の価値が高められることを期待している。

## 謝辞

本報告をまとめるにあたり、利尻町立博物館の佐



35	36
37	38
39	40

図 35-40. 利尻島.

藤雅彦氏をはじめ、利尻島の皆様には参考となる情報を提供いただいた。山谷文人氏（利尻富士町教育委員会）、藤沢隆史氏（礼文町教育委員会）には、現地調査にご協力いただいた。大沼忠春氏には、考

古学分野の文献や情報を提供いただいた。その他、北海道大学附属図書館北方資料室、大学文書館には史料調査で便宜を図っていただいた。記して謝意を表したい。

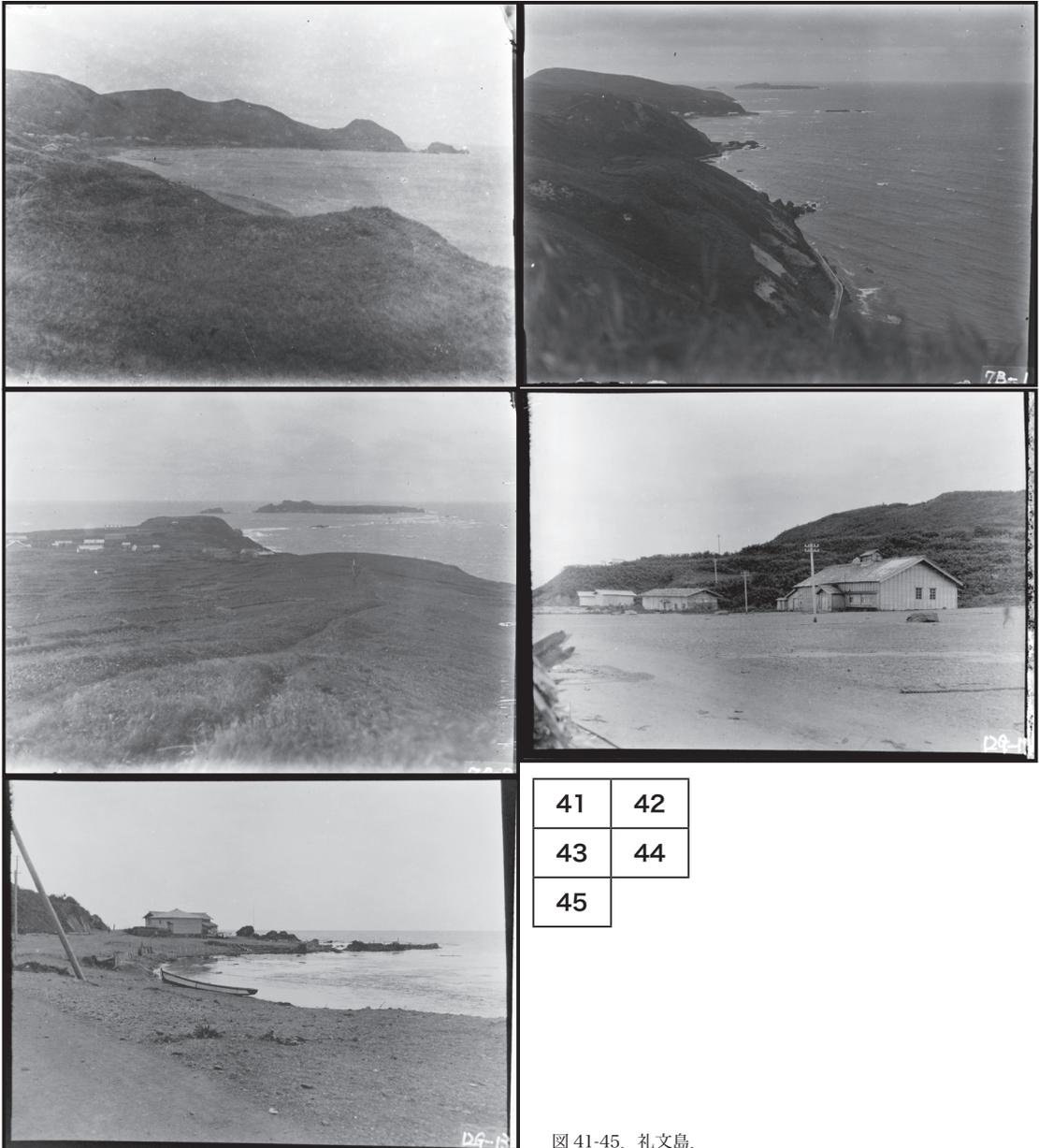


図 41-45. 礼文島。

本報告は、平成 17 年度利尻島調査研究事業の助成を受けて実施した調査である。

#### 参考文献

- 八田三郎, 1912. 熊の渡海. 動物学雑誌, 24(288): A1-A3.  
 石川貞治, 1889. 北海道ニ於テアイヌ人種研究ノ急務ト石器時代住民ノ分布. 東京人類学会雑誌,

4(38): 311-316.

- 神保小虎, 1892. 北海道地質報文. 北海道庁. 札幌.  
 加藤 克, 2002. 史料紹介『札幌農学校所属博物館標本採集日記』(1). 北大植物園研究紀要, 2: 69-84.  
 加藤 克, 2004. 札幌農学校所属博物館のアイヌ民族資料. 北大植物園研究紀要, 4: 1-54.  
 加藤 克, 2008. 北海道大学植物園所蔵アイヌ民

- 族資料について：歴史的背景を中心に、北大植物園研究紀要, 8: 35-91.
- 加藤 克・市川秀雄, 2004. 北大植物園・博物館所蔵アメリカ自然史博物館鳥類標本について、北大植物園研究紀要, 4: 65-75.
- 加藤 克・市川秀雄・高谷文仁, 2009. 札幌農学校所属博物館における鳥類標本管理史 (1)：東京仮博物場から札幌農学校所属博物館初期まで、北大植物園研究紀要, 9: 29-94.
- 川上瀧彌, 1900. 利尻嶋ニ於ケル植物分布ノ状態、植物学雑誌, 15(158): 77-83.
- 川上瀧彌, 1900. 利尻嶋ニ於ケル植物分布ノ状態(承前)、植物学雑誌, 15(159): 99-112.
- Klocke, E., 1904. Tiergeographische Studien ber Hokkaido. 日本動物学彙報, 5(2): 57-112.
- E. モース (著), 石川欣一 (訳), 1939. 日本その日その日. 創元社. 東京. 331pp.
- 名取武光, 1933. 利尻, 礼文両島に於ける考古学的調査報告. 史前学雑誌, 5(3): 1-30.
- 名取武光, 1972. 利尻, 礼文両島に於ける考古学的調査報告. アイヌと考古学 (一), 名取武光著作集, 1: 10-37.
- 名取武光・後藤寿一, 1933. 利尻・礼文島紀行. 蝦夷往来, 11: 199-211.
- 沖野慎二, 1999. 北海道大学農学部博物館のアイヌ民族資料 (上). 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要, 5: 1-19.
- 利尻町史編集室 (編), 2000. 利尻町史. 通史編. 利尻町. 1162pp.
- 杉浦重信, 1993. 黎明期の千島考古学と石川貞治. 知床博物館研究報告, 14: 47-54.
- 坪井正五郎, 1888. 石器時代の遺物遺蹟は何者の手に成たか. 東京人類学会雑誌, (3)31: 382-403.
- Yamashina, Y. & S. Ikeda, 1932. A List of Birds' Skin Belonging to Anatidae Kept in the University Museum. *Trans. Sapporo Nat. His. Soc.*, 14(1): 57-67.
- ンター植物園.
- 2 北海道大学大学文書館所蔵, 札幌農学校簿書 329 「明治二十年一月以降 校員諸願届書綴」.
- 3 前掲注 (2) 「明治二十年一月以降 校員諸願届書綴」.
- 4 北海道大学大学文書館所蔵, 札幌農学校簿書 319 「復命書編冊」.
- 5 内容については順次翻刻している. 本報告に関する部分は, 加藤 (2002) を参照されたい.
- 6 北海道大学大学文書館所蔵, 札幌農学校簿書 228 「明治十八年一月以降 局長上申本局稟議録」.
- 7 前掲注 (4) 「復命書編冊」.
- 8 採集日記が書き改められた件については, 別稿を予定している.
- 9 北海道大学大学文書館所蔵, 札幌農学校簿書 405 「二十三年公文録 四冊之内 校員・生徒・雑件」 (『札幌農学校史料』754 「明治二二年度事業功程報告材料回答の件」) として採録).
- 10 【38513】と同形式の鞘【38512】も台帳上は【38513】と同様に「礼文香深村, 明治20年8月16日」というデータをもつ. 【38512】にはラベル1が付属せず判断が難しいが, 博物館への受入時点で両者を1点として取り扱っていたものと推測される.
- 11 前掲注 (2) 「明治二十年一月以降校員諸願届書綴」.
- 12 前掲注 (2) 「明治二十年一月以降校員諸願届書綴」.
- 13 北海道大学大学文書館所蔵, 札幌農学校簿書 307 「校裁録」.
- 14 前掲注 (4) 「復命書編冊」.
- 15 管理番号 496 のワタリガラスには, ラベル3が付属していないが, ラベル1が付属し, 「廿年十月卅日, 礼文郡香深村産」という「採集日記」期の記述が確認されることから, 合致するものとして示している.
- 16 管理番号 464 および 465 ヒドリガモには「14日」と記載した別のラベルが付属している. また, 管理番号 468 ヒドリガモには「16日」と記載されたラベルが付属している. このラベルは, ラベル3よりも後に利用されたものであり, おそらく山階芳麿と池田真次郎によるガンカモ目録 (Yamashina & Ikeda, 1932) 編集時に付与されたものと推測される. 山階目録ではこれらの標本を14日, 16日採集としているが, 吉川の復命

## 脚注

- 1 正式名称は北海道大学北方生物圏フィールド科学セ

書の情報が信頼されるべきものであり、利用にあたっては留意が必要である。

- 17 標本交換については加藤・市川 (2002) を参照されたい。交換された標本の情報については、アメリカ自然史博物館 Mary ReCroy 氏の協力を得た。なお、アメリカ自然史博物館の台帳では採集年次が異なっている。当該標本未見のため確実ではないが、他の標本調査から、アメリカに送られた際に添付した目録、もしくはアメリカ自然史博物館での登録時の誤りがあったことが確認されており、1887 年の誤りであると推測される。
- 18 前掲注 (4) 「復命書編冊」。
- 19 調査にあたっては、北海道大学大学院農学院加藤ゆき恵氏の協力を得た。
- 20 「札幌博物学会記事」(『動物学雑誌』100 号, 1897 年)。
- 21 後述の川上瀧彌によれば、堀の調査は明治 21 年となっているが、復命書の記述や北大総合博物館所蔵の堀採集標本から、明治 20 年が正しい。
- 22 北海道大学大学文書館所蔵、札幌農学校簿書 89「公文録」。
- 23 ここで石川による「北海道遺跡地名表」が利尻島の

考古学の嚆矢として位置付けられている点について、付言しておく。石川の報告 (1889) は明治 22 年 4 月に発行された『東京人類学会雑誌』に掲載されており、同年 10 月に行われたと考えられる現地調査以前にとりまとめられたものである。石川は「表及地図ハ余カ本年二月中人類学会ニ於テ北海道ニ在ル石器時代ノ遺物遺跡ト題シテ談話セシモノニ昨夏坪井正五郎君ノ北海道旅行中見聞ニ関スルモノヲ加ヘ」たものとしている。坪井は談話 (坪井, 1888) として札幌博物館陳列古物として「北見国利尻郡鷺泊、同国礼文香深村」の遺物 (小寺の採集品) を紹介している。石川が地名表を作成するにあたり、坪井の談話を利用したのか、実際に博物館の資料を調査したのかは明らかではないが、活字として利尻島の考古学資料に言及したのは、石川よりも坪井の方が早い (大沼忠春氏の教示による)。

- 24 北海道大学大学文書館の協力を得た。
- 25 報告に利用した両島の地図の写真もあるが本稿では割愛した。また、撮影場所の確認が取れない写真も多くあるため、利尻・礼文調査時に撮影された写真は増加する可能性が高い。